

出口治明さん連続講義

「古典を読めば、世界がわかる」

第5回 2019年2月28日



『歎異抄』

唯円 = 著 ・ 親鸞 = 述

(川村湊 = 訳、光文社古典新訳文庫)



<解説>

浄土真宗の開祖・親鸞聖人の教えを弟子の唯円が親鸞の死後に著したもの。親鸞は、法然のただひたすら「南無阿弥陀仏」と唱えればよいという教えからさらに進み、「善え奴が往生するんやさかい、ましてや悪い奴がそうならんはずがない」(P.17)とあるように、自分の力で行う修行や戒律を守ることを否定して、完全な「他力」つまり一心に阿弥陀如来の救いを願うことだけに専念するというもので、善行を積むことや悪行を犯さないという一般的な道徳や倫理から超越している。これが他力本願で「何でも自分の力でやろう思うとる奴は、『お願いします』ちゅう気持ちの欠けてる分だけ、アミダはんのいわはる誓いと違とる」と説明する。

親鸞は、自分のオカン(母)やオトン(父)の供養のためには、いっぺんも「ナンマンダブ」と念仏をとなえたことはあらしまへん。(P.20)

親鸞は、弟子は一人ももってはおらへん。(P.21)

「ひとまかせ」ちゅうほんまもの教えを説明するいろんな聖なる教えは、本願を信じて、「ナンマンダブ」いうたらホトケはんになれる、それ以外のどんな学問も往生の要であるわけなんかないやろ、

ということや。(P.29)

今の生で煩惱とか悪い障りなんぞを断ち切るなんちゆうことは、きわめて有難い(有ることが難しい)もんや。(P.41)

など、親鸞のわかりやすい教えを素朴な言葉で伝える。

これまで現代語訳はいくつも刊行されてきたが、「親鸞の語り口はもっと耳に残りやすく、わかりやすいものであったはず」という訳者の思いから、本書は関西弁で表現。当時の聴衆の「なんとなくわかる」という感覚の再現を試みている。

親鸞略年譜

- 1173年 京都に生まれる。
- 1181年 出家し、比叡山に入る。
- 1201年 六角堂に参籠し、95日目に聖徳太子の夢告を得て法然の浄土門に入る。
- 1205年 法然『選択本願念仏集』を書写。善信に改名。
- 1206年 この頃、すでに妻帯し、長男の善鸞も生まれていたと類推される。
- 1207年 法然門下の法難に逢い、法然は土佐へ、親鸞は越後に流罪される。
- 1211年 法然とともに流罪を赦免される。
- 1212年 妻子とともに常陸へ向かう。
- 1224年 『教行信証』を執筆。
- 1230年 『唯信抄』を書写。
- 1236年 京都に帰る。
- 1240年 19歳の唯円が弟子入りする。
- 1248年 『浄土和讃』『浄土高僧和讃』を著す。
- 1251年 常陸門弟の間で、競技に関する争論が起こる。
- 1253年 長男の善鸞が関東へ赴く。
- 1255年 『聖徳太子和讃』を著す。
- 1256年 善鸞を義絶。
- 1262年 京都の善法院にて死去。89歳
- 1286年 この頃『歎異抄』が成立か。

出口治明さんが選ぶ「あわせて読みたい」BOOK GUIDE



『スッタニパータ 仏教最古の世界』 並川孝儀(書物誕生 あたらしい古典入門/岩波書店)

ゴータマ・ブッダ(釈尊)やそれに続く最初期の仏教世界に導いてくれる經典で、インドで誕生したもっとも古い時代の仏教を知ることができる。仏教は、古代インドの伝統宗教バラモン教の対立軸として誕生。『スッタニパータ』は、この初期經典のうちインドや中国などの北方に伝承されたものではなく、南方(スリランカ)に伝承された『小部經典』に収められている。本書では、まず仏教がジャイナ教と同時期に、バラモン教の祭祀への批判から誕生したことを紹介(出口さんも『仕事に効く教養としての「世界史」』P.82で仏教の誕生について解説しています)。主題となっているのは、他者に対する慈しみの心、仏・法・僧の三宝を信じ、それに帰依することによって得られる幸せ、何が最高の幸福であるかである。ゴータマ・ブッダは、ジャイナ教と同様に、輪廻転生から解脱して自由になるべく、あらゆる生物に対する不殺生戒を説いたが、ジャイナ教のように身体を滅尽させるような苦行生活を強いることはなかった。最初期の仏教では呪術や供犠を否定し、修行者にもそのような行為は禁止していたこともわかる。ゴータマ・ブッダは、過去・現在・未来をめぐる「輪廻」を現在に限定し、現世において正しく自覚して修行すれば「涅槃」を得るという基本的立場をとっていたことを明らかにし、「無我」「涅槃」「煩惱」「縁起」などの仏教思想もわかりやすく解説している。



『浄土三部經(上)無量壽經』 『浄土三部經(下)觀無量壽經・阿彌陀經』 中村元、早島鏡正、紀野一義訳注(岩波文庫)

数ある仏教の經典のなかで日本人の心にもっとも深く感化を及ぼしたといわれる『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』をサンスクリット原典、漢訳經典、チベット訳經典をもとに現代語訳したもの(※『觀無量壽經』は、チベット訳は見つかっていない)。『無量壽經』と『阿彌陀經』の成立は140年頃(あるいはそれ以前)、『觀無量壽經』はそれよりも後で、中央アジアで作製されたと考えられている。

『無量壽經』は、若き尊者のアーナンダが師との対話を通して大願を成就する様子を描く。師の言葉は

「かれは、求道者の行ないを實行しながら、自分や他人や自他両方を傷つけるような言葉を口に出すのはやめて、自分や他人や自他療法に利益と幸福とをもたらすような言葉を口にすること、そのことだけにいそしんでいた」(P.54)などわかりやすく示唆に富む。

これらの經典では必ずしも熱烈な信仰の絶対性を明らかに説いてはいない。ここで説くのは心のプラッサダであり、それは心が澄み切って明るく軽やかになった状態である。弥陀に対する信頼ではなく、無量寿仏を念じ、その不思議な力によって衆生が極楽世界に生まれることができるとするもので、一神教ではなく他の信仰をも許容するものである。



『日本宗教史』 末本文美士(岩波新書)

日本人の無宗教はしばしば話題に上るが、もともと仏教語であった宗教という言葉が今日のような意味を持つようになったのは、明治初期で「religion」の訳語として使われるようになってから。日本では、仏教も神道も個人の強い信仰を要求しなかった。日本で宗教は、どのような形で根付いてきたのか。遺跡からは、縄文時代から何らかの宗教行為がなされていたことは判明している。著者は『古事記』や『日本書紀』から古代の仏教と神道の関係、中世における鎌倉仏教の誕生と広がり、定着していく過程、仏教と伊勢神道との関係、さらに近世のキリスト教の到来とその影響を解説。仏教が葬式仏教として根付いた経緯や儒教が宗教として果たした役割についても詳述する。さらに靖国問題やオウム真理教事件まで、日本における宗教のあり方を概観できる一冊。



『親鸞と日本主義』 中島岳志(新潮選書)

大正から昭和初期にかけて日本では親鸞ブームが起きた。やがて「宿業」「絶対他力」「自然法爾」といった思想は右翼や国粹主義者に取り込まれていく。なぜそのようなことが起きたのか。著者は、その時期に活躍した亀井勝一郎や吉川英治ら思想家、作家らを取り上げ、彼らが親鸞を自らの思想にどのように取り込み、表現したかを詳述する。

天皇の絶対化を唱えた『原理日本』という雑誌を創刊したメンバーの多くは親鸞の信奉者だった。彼ら

は自らの思想とは少しでも相容れない主張をする学者を徹底的に糾弾し、その著作を発禁に追い込むこともあったという。著者は、メンバーの一人、三井甲之が説く、祖国のために民族的生活を精一杯生きることこそ、絶対他力の救いを獲得する道だとする言葉が自力の限界を感じる者にとって心地よく響いた様子を伝える。文芸評論家の亀井勝一郎も阿弥陀如来の「他力」を天皇の「大御心」と読み替え、国民は「私」を捨て、すべてを大御心に委ねるあり方こそ絶対他力の実現とし、「念ずる心」が兵士たちの私心滅却の精神を支えた。「信仰」と「愛国」の危険な関係がよくわかる。



『日本的靈性(完全版)』 鈴木大拙(角川ソフィア文庫)

初版が出版されたのは第二次世界大戦末期の 1944 年。『日本的靈性』とは、軍部が唱えた日本精神に対抗したもので、戦後の再版に際して著者は、当時の日本の状況を「日本人の世界観及び人世観が深さと広さを書いて居たところから発する」とし、「われら日本人の宗教意識なるものが十分な発展をして居ないというところに国民の注意を向かわせたい」と述べる。著者は、古代の日本人には深刻な宗教意識がなかったと指摘し、日本的靈性の根源にあるのは仏教で、日本人が靈性に目覚めたのは鎌倉時代であると述べる。この鎌倉精神を代表するのは親鸞聖人だ。親鸞の真骨頂は『教行信証』ではなく『歎異抄』にあるとして、「親鸞は罪業からの解脱を説かぬ。すなわち、因果の解縛からの自由を説かぬ。それはこの存在一現世的・相關的・業苦的存在をそのままにして、弥陀の絶対的本願力のはたらきに一切を任せるといのである」(P.142) とし、鎌倉時代にいかに『日本的靈性』が芽生え、日本人がそれを受け入れ、伝えたかを詳しく述べている。巻末の解説は『日本宗教史』の著者末木文美士によるもの。

編集部便り

出口治明さん連続講義「古典を読めば、世界がわかる」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

よろしければ、ご意見・ご感想等、以下のアドレスまでお送りいただけませんか。
メールアドレス salon@gr.kobunsha.com 次回以降の参考とさせていただきます。

Facebook ページも作成しました。Facebook にて、「@salon.kobunsha」と検索していただくと「光文社【本がすき。】サロン」というページが出てきますので、ぜひ「いいね！」を押してください。

また、講義の動画配信サイトも公開しております。各回の講座を、20分～30分ほどに分割してアップしております。別途登録料がかかりますが、よろしければ一度サイトにアクセスしていただければ幸いです。

<https://salon-kobunsha.jp/>

光文社【本がすき。】サロンでは、今後とも魅力的な講義を企画中でございます。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

2019年2月28日

光文社新書編集部
Web「本がすき。」編集部
運営スタッフ一同